

私にとっての多喜二

「治安体制」と「思想史」の両面から

荻野 富士夫

私は、「特高警察」や「治安維持法」などの「治安体制」を専門の領域とする一方で、「大逆事件」前後の「初期社会主義」という「思想史」を本来の領域としてきたつもりだが、ここ二十年來は前者に比重がかかってきた。それは、一つ小さな到達が新たな課題を次々に導いてくれるとともに、これらの課題が現代につながるという自覚と責務に促されてのことであつたが、消極的にいえば「思想史」の領域に新たな展望が見いだせなかつたためである。

卒論や修論を含め、三十代までの「初期社会主義」についての論稿を、一九九三年に『初期社会主義思想論』としてまとめた。いわゆる「冬の時代」の思想的豊饒さの追究を主題とするなかで、「大逆事件」前の初期社会主義の前半段階（「明治社会主義」）から後半段階（主に一九一〇年代）に至る諸様相を、接続（石川啄木・土岐哀果、河上肇ら）、転換（大杉栄、荒畑寒村）、継承（堺利彦、安部磯雄）の観点から概観した。しかし、「冬の時代」が終焉し、日本共産党創立、そして無産政党結成に至る一九二〇年前後から二〇年代半ば以降に、

うまく思想史的な課題を設定することができなかつた。

現在から振りかえれば、次のような理由からである。未発であるがゆえに混沌とし、理想や正義感にあふれた熱気と手あかにまみれない思想の純粹性に富むこと、それらの担い手たちの多様な個性が、「初期社会主義」の魅力と捉えられていた。それに対して、「初期社会主義」に惹かれるものは、概して「初期社会主義」の収束とその後への関心は希薄で、私も含めて大方は、一九二〇年代以降のイメージとして社会変革を求める思想と運動の分化と対立、離合集散・権謀術策をまず想起してしまつた。おそらく「初期社会主義」の次の段階は「社会運動」の段階とすべきだろうが、その思想にどのようなぶつかつていくか、暗中模索の状態にずっとどまつていたのである。

*

こうして「思想史」の領域に展望を見いだせぬまま、「治安体制」の考察に傾くことになつた。その少し前に小樽に職を得たことから多喜二に論及する機会があつたものの、本格

的に多喜二について考え始めたのは二〇〇四年頃からである。それも多喜二祭での講演や中国での多喜二シンポジウムへの参加という、外的な契機による。

そうした機会を得て、あらためて『小林多喜二全集』に向き合うことにより、少しずつ多喜二を「治安体制」の観点からだけでなく、「思想史」の対象としてとらえることができようになるようになった。にわか勉強を通じて、「多喜二の創作の卓越性の根源」について、「多喜二は、ある出来事や事象を常に多面的に総合的に把握するように心がけ、実践した。特に中長編小説を意識的に積み重ねていくことで、多喜二は帝国日本の実像を全体として提示しようとした。それは、思想を、そして思想を表現するものとしての文学を、たえず「社会的なものとして捉える視座を持ちつづけた」（小林多喜二の生きた時代と現代、二〇〇六年）とする地点に至った。

その後、小説『蟹工船』が日本国内にとどまらず、文字通り世界的に広がるなかで「現代」と重ねあわされて爆発的に読まれていく事態に刺激も受けて、「多喜二の創作の卓越性」を再認識することになった。それを私自身の「思想史」の関心に引きつけて、主に小樽時代の思想形成の過程を日記や書簡などを通して再検証してきたことが、ここ数年来の多喜二に関わる仕事となった。その過程で、『蟹工船』作者として「プロレタリア文学の闘士」という多喜二像のみが再固定化することを少しでも揺さぶり、多喜二が人並み以上に悩み、周章

狼狽し、はしやぎ、優しさとユーモアにあふれた少年・青年であったことを知ってもらうために、等身大の人間性が彷彿とする手紙を編集する機会に恵まれた。また、母セキの多喜二語りを紹介することもできた。

*

現在の時点で私なりに多喜二を「思想史」上に位置づけるならば、その二十代前半までの思想形成・文学形成の段階は「初期社会主義」から次の段階への転換期にあたり、五年に満たない二十代後半の思想と文学の展開は、次の段階Ⅱ「社会運動」の段階に相当するといえる。

そして、多喜二の思想的・文学的な営みを手がかりに、ようやく前半期の「初期社会主義」から「社会運動」への転換期の把握に近づくことができた。

具体的に手がかりとなったのは、多喜二の「転形期」認識である。多喜二は、小樽の手宮地区を舞台とした小説「転形期の人々」（一九三一年十月から三二年四月にかけて『ナツプ』・『プロレタリア文学』に連載、未完）の「序論」を、一九二六年の「冬が近い」時期から書きだす。「序論」の終わりの「作者附記」で、「次の「前篇」では福本イズムの擡頭、「中篇」では小樽のゼネ・スト、「後篇」では福本イズムの没落から三・一五まで、という風に進められる予定である」と記していた。連載中の談話では、「小樽に於て、組合、学聯、工場、ゼネスト等の中に、山川イズムが没落して福本イズム

が如何にして起つたか、又それが如何にして再び没落したか」という「一つの時代を書いてゆく積り」（「転形期の人々」の創作にあたって）『短唱』、三二年四月）と述べていた。

この「序論」のなかでは、回想的に二四年中の高商の「政治研究会」や「小樽の労働組合結成の第一回準備会」を「転形期」の助走期間として描き、軍事教練反対運動（一九二五年秋）を「小樽の街の輝かしい左翼の伝統」の発端とする。「小樽のゼネ・スト」とは、一九二六年六月の磯野小作争議につづく、十月の小樽港湾争議を指す。このように、多喜二は一九二五年前後の数年間を「転形期」と認識する。それは、「初期社会主義」から「社会運動」への転換期にほぼ相当する。

しかも、この時期は、何より多喜二自身の思想と文学における「転形期」であった。自筆「年譜」（一九三一年一月執筆）には、「ぼくは小樽高商の所謂「軍教反対問題」に関係した友人から「マルクス」や「レーニン」や当時評判だった「福本和夫」の著作を読むことをすすめられた。なおその上に、山本懸蔵の立候補、種々の研究会、あの「三・一五事件」等々が、そのぼくの傾向を決定的なものにした」と書く。これに先立ち、十代後半からの社会主義への漠然とした関心と傾斜があった。

少しさかのぼって、多喜二の思想・文学形成をみてみよう。

十代半ばから多喜二は「白樺」派、とくに志賀直哉の小説技法に強い影響を受ける一方で、創作の主題としては早くも社

会の矛盾やゆがみ、それらから発する人間心理の揺れや陥穽を選び取りつつあった。十七歳の投稿小説「老いた体操教師」は、中流階層の生活苦や転落の恐怖を題材として、そこにとおしさやユーモアを醸しだす。多喜二の関心は次第に「人が幸福になるにはどうすればいいんだろう」という点に収斂し、読書と思索もそれに集中することになり、文学的創作もその模索の表現の手段と場となる。

小樽高商の卒論（二四年一月）に無政府主義者クロポトキンの『パンの征服』の翻訳を選び、同人雑誌『クラルテ』第三号（二四年七月）では「最も道德的な人こそ、最も偉大な社会主義者であらねばならぬ」（「修身とサウシアリズム」と論じていた。しかし、その地点から「思想的に、断然、マルキシズムに進展して行つた」と二八年一月一日の「日記」と書きつけるまでには、かなり長い時間を要した。二七年二月の時点では、「社会主義者として、自分の進路が分つていながら、色々な点で、グズグズしている自分である」と、自身もどかしさを感じているが、まもなく「本ばかりよんで、社会主義とはこんなものだ、とか、調子に乗るのは、所謂、頭からの社会主義者である。が、胸から、胸の奥底から、どうしても社会主義者にならずにいられないのがある」（二七年五月、「日記」と考えるに至る。

「作家も。作家だから！」こそ社会科学の学習が必要と自覚する多喜二は、独学では十分に読みこなせなかつたもの

の、小樽社会科学研究会に参加することで社会主義文献を破し、自らの血肉化していった。また、この研究会を通して本格的に「小樽の労農党に交渉を持つ迄に、内的進展をするに至った」（「日記」、十一月二十三日）。こうした紆余曲折の長い躊躇逡巡の時期を経て、多喜二は「思想的に、断然、マルキシズムに進展して行った」と自覚し、同時に「新しい時代が来た。俺達の時代が来た」と宣言することができた。十代半ばからの人道主義的観点からの社会変革への漠然とした志向から、二十代前半のジグザグとした社会主義への到達過程は、ある意味で混沌とした未発の可能性を多く含む「初期社会主義」の再現とみることができる。

古川友一らの社会科学研究会のメンバーを通して、小樽の労農党・労働運動の面々と知りあうなかで、それまでの交友関係では出会わなかつた個性や資質、生活と運動ぶりに圧倒された多喜二は、彼らを「驚異」と呼び、自らの文学を鍛え、高めていった。社会をえぐり出すこと、そして「大きく時代の様相をつかみ上げ」（『小樽新聞』、二八年一月三十日）ることへの文学観の転換も同時に果たした。

*

多喜二の「転形期」認識の過程でもう一つ重要なことは、田口タキ的存在の救済を考えつづけたことである。タキとその一家を知ることによって「貧窮」の底の底をみた多喜二は、タキを個人的に救うものの、タキに象徴される「その闇のど

ん底」「日の光を一日も見ず、土の底にうごめいている多くのもの」の救済を、「憂鬱」となるほど真剣に考える。その解決は人道主義ではどうにもならないことを理解すると、社会の変革の必要性・必然性の認識に至るのである。

「その出発を出発した女」は、タキの失踪直前の二七年五月前後に起稿され、タキ不在の衝撃を受け止めつつ、十一月ころまで書き継がれたが、途中で断念した創作である。「羽がやぶれている」小さな哀れな聖女」として描かれる「お文」は、「カフエー〇〇」から曖昧屋「越後屋」へ転売され、自殺未遂後、サラリーマンの安本のもとに逃げる、という設定となつている。中断直前の場面に、「世界を思う」心と「女をおもう」心、「お文」に対する場合、安本にとつてこの二つがしっくり合つていた」という一節がある。それは、多喜二の到達点であり、新たな出発点にほかならなかつた。この小説こそ未完に終わったものの、ちょうど社会主義思想・運動への「内的進展」を果たしたと自覚する多喜二にとつて、この「世界を思う」心と「女をおもう」心がしっくり合うこと、つまり、二者択一ではなく、共に希求する、どちらも大事なものと考へて、しかもそれらが「しっくり」合うような社会・生き方の実現こそが必要だと考へる地点に立つたのである。

ここが、「社会主義者」多喜二の出発点となつた。その発想は、「初期社会主義」における志士仁人意識や「総同盟罷工論」の現実性の欠如などという問題性を意識的・無意識的

に克服するものであった。

*

「新しい時代が来た。俺達の時代が来た」として「我等何を為すべきかではなしに、如何に為すべきかの時代だ」と叫ぶ多喜二は、必然的に第一回普選の選挙運動に加わっていた。その直後、多喜二が「驚異」と読んだ小樽の無産運動・労働運動関係者を三・二五の大弾圧が襲い、「半植民地的な拷問」がなされていくことに、「煮えくりかえる憎悪」（一九二八年三月十五日）『若草』一九三二年九月号）を燃え上げさせ、小説「一九二八年三月十五日」を一挙に完成させる。その完了後、わずかに二週間余りで多喜二が書きあげたのが、「東俱知安行」（完成は二八年九月五日。『創作月刊』に送るものの、掲載とならず。のち『改造』一九三〇年十二月号に発表）である。その創作意図は後日、次のように語られる（一九二八年三月十五日）『若草』一九三二年九月号）。

この作品はその芸術的価値は別として、私には忘れられない意義を持つている。それはたゞ単に「私自身」のことを書いていくという理由からではなしに、当時（一九二七年—一九二八年頃）の日本のプロレタリア運動が通ってきた一つの面がその中に描かれているからである。

日本における最初の普選をモメントとして、勿論労働者農民が己れ自らの活動舞台へ登場してきたのではあるが、それにもまして何処の国でもその運動の初期に最も

著しくあらわれる急進的な知識階級のホウハイとした合流であった。その一端にふれているのだ。だから、成程その作品は私自身のことを書いたのではあったが、その私自身のことを通して一つの歴史的事実を示しているという意味で、個人的な経験範囲を越えていると考えられる。

「当時（一九二七年—一九二八年頃）の日本のプロレタリア運動が通ってきた一つの面」、すなわち労働運動への「急進的な知識階級のホウハイとした合流」のあり様が、多喜二自身の直近の経験として描かれる。会社員あるいは銀行員として労働党の選挙「運動」に関わりながらも、その関わり方は常に「窮屈な、にえきらない、面倒臭いものだ」という負い目を感じている。そこに地方での遊説人員を急遽埋めなければならなくなると、その機会に「私」は「謀叛を起す意気込みで応じた。「静かな、然し身体全体を底からユキユキとゆすぶってくるような興奮」を覚える。

多喜二はすでに「頭からの社会主義者」ではなく、「胸の奥底から」の社会主義者であるべきことを「頭」では理解していたが、それが実践で試される機会がやってきたのである。「私は叫ぶ。と、あの無数の群集がそれと一緒に上ってくるのだ。それは本当だろうか」という課題に挑むために、「私達の話す演説が相手の気持をはつきりつかみ得るためには、相手が現実になんを感じ、何を要求しているかという事を、

その人達が実際日常に経験していることから取りあげて示してやらなければならない」という明確な自覚をもって、「私」は演壇に立つ。「本で覚えた偉そうなマルクス、レーニンの理窟の暗誦は「あくび」を起さすことではない」として、聴衆に「台所と政治」の問題を訴えるものである。

「……諸君等が誰を選ばなければならないかは、然し諸君等よりもモットはつきり、そして適確にその事を知っているものこそ誰であらう、あの薄暗い惨めな台所で、雑巾切れのように働きつかれ、永年の貧苦に打ちのめされている諸君等の細君であり、諸君等の年老いた母親なのである！」

「白い手をした彼奴等は、この野郎と、鍬や鎌で（二十九字削除）……」

ここにはまず「ブルジョワ連」に対する憎悪や憤怒の率直な表明があり、さらにその構造的な解明にまで進みでている。のちに『蟹工船』における執筆意図について、「帝国軍隊―財閥―国際関係―労働者」（蔵原惟人宛書簡、一九二九年三月三十一日）という「たった一本の「糸」のつながりを「透き通るような鮮明さ」で明らかにすることにあつたと語るが、それに先だつてここでは「私」に、「一本の醤油―醬油店―問屋―醬油株式会社―重役―三井、三菱等―ブル政党（政友会、民政党）等―そして此等が逆に搾取関係にとんぼがえりする」と語らせた。「台所と政治」が「まぎれもなく、たつ

た一本の糸でつながっている」というカラクリの暴露であつた。「選挙はお前達の「台所」の問題だ」、それを「分り易く知らせてやらなければならない」などという箇所に「急進的な知識階級」の指導者然とした傲慢さがみえるとしても、この構造的な把握は、社会科学文献の学習や銀行員としての職務経験などから導き出されたもので、独創的な「胸の奥底から」の社会主義者としての自立をみることができよう。

ほぼ半年前の選挙活動を題材に、「その運動の初期に最も著しくあらわれる急進的な知識階級のホウハイとした合流」のあり様を「東俱知安行」で同時代的に描き、その三年後、客観的に振りかえる余裕をもって、そこに至る「一つの時代」を「転形期の人々」のなかに描きました。その「転形期」の把握は、みごとに「初期社会運動」から「社会運動」への転換に符合している。

*

「東俱知安行」のもう一つの卓越性は、「社会運動」を「何代がかり」の運動として認識していることである。まず前半部の俱知安に向かう列車のなかで、小樽の労働運動の指導者「鈴木」（モデルは実在の鈴木源重）に、「俺達の運動は皆今始められたばかりさ。何代がかりの運動だな」と語らせる。羊蹄山の麓の猛吹雪のなかを馬櫓で突進する場面でも、鈴木に「全く、伊達や道楽で、この運動なんか出来ないや」と吐露させる。「俺達の運動は皆今始められたばかり」であり、「ま

だ発端という処にさえも行っていない」ことを冷徹に認めなければならぬ。

後半部で「私」の前の登壇者として水沢という「老人」を設定する。その「老人」の酔った際の口癖は、「俺は幸徳秋水を知っているんだ。——幸徳はねえ、何時でも巻煙草をこんな風にくわえて、なア水沢、お前寒くないかッて言ったもんだよ」である。「彼は十八の時から、こういう運動をやつてきていた。そして、七十になろうとする今でも」その事だけ「は変らなかつた」とされ、俱知安に農民組合をつくる時には、微温的な救済組合的なものに反対して、「戦闘的」な組合をつくるのに尽力したという。その生活と運動は、娘が身を売つて支えているともされる。

この水沢「老人」は、「初期社会主義」段階において真狩村で試みられた「平民社農場」関係者を想起させる。「平民社農場」の創設と運営には当時の小樽の社会主義者も協力していただけに、その後も小樽の無産運動関係者には語りつがれ、おそらく小樽社会科学研究会を主宰する古川友一から多喜二は聞かされたと推測される。ただし、十八歳で平民社とされる運動に参加し、一九二八年の普選の選挙運動時に七十歳という設定には無理がある。

「平民社農場」の精神を引き継ぐといつても、二十年ほど経つても細々とした活動にとどまり、いつ「目鼻」がつくかもわからない。にもかかわらず、無私の、報われることを期

待せず、「初期社会主義」の「自由、平等、博愛」の実現のために「大きな真剣さ」をもって、「雪にうづもれている蝦夷の一寒村」での生涯を送る「老人」は、小樽で出会った「驚異」とはまた別の「驚異」にほかならなかつた。文字通り、「この運動をしようとするのは、冗談や流行や道楽で出来るものじゃない」ことを身をもつて知らされた「私」は「憂鬱」になる一方で、「何代がかりの運動」であることに新たな覚悟を定めていく。

「当時（一九二七年—一九二八年頃）の日本のプロレタリア運動が通つてきた一つの面」を「転形期」として描くにあたり、多喜二が水沢「老人」を設定した意味はどのように考へるべきだろうか。「労働者農民が己れ自らの活動舞台へ登場してきた」という「社会運動」の段階の前史として、幸徳秋水と水沢の接点を捉え、「初期社会主義」の精神の継続を「老人」を通して体現させる。それは「何代がかりの運動」とはいつても、せいぜい一代や二代の運動が経過したにすぎない。短兵急に運動が拡大するわけでも、革命が到来するわけでもないことは当然のことである。「大逆事件」や「三・一五事件」などの官憲の弾圧に見舞われ、運動がズタズタにされることも、「何代がかり」の長い歴史からみれば、大打撃ではあつても、一喜一憂することでもない。おそらく、多喜二はこのような地点に到達していたのではないだろうか。

この「何代がかりの運動」観は、多喜二の作品に貫かれて

いる。小説「一九二八年三月十五日」の最後（『戦旗』掲載時には削除）では「獄内デモ」と獄外の「再建のための闘争」が描かれ、「蟹工船」も「そして、彼等は、立ち上った。——もう一度！」と結ばれる。遺作となる「地区の人々」の副題は「火を継ぐもの」であった。地下生活中の多喜二は早晩の検挙、そして拷問での死をも覚悟していた節があるが、それは「何代がかりの運動」からいえば、まだ発端に近いところの犠牲の一つにすぎなく、「火を継ぐもの」がつづくことを確信していた。

*

「初期社会主義」から「社会運動」への転換については、ここでは多喜二の思想・文学形成の事例をあげたにすぎず、さまざまな様相が検討されねばならない。多喜二に近いところでは、『種蒔く人』から『文芸戦線』、さらに日本左翼文芸総連合『戦争に対する戦争』などの共同戦線の試みから、分裂・対立の状況があるだろう。また、「初期社会主義」の内包する課題である民主主義的変革が、「社会運動」の段階において、どのように継承されたかは、無産政党の綱領や二七テーゼ・三三テーゼなどの検証が必要となる。「初期社会主義」から「社会運動」へ、何が断絶・克服され、何が接続・継承されたのか、「日本社会主義史」への展望を持ちつつ、ここを出発点として考えていきたい。

そして、多喜二に戻っていえば、この二十代前半の「転形

期」を経て、「社会主義者」を宣言した後の五年余の思想的・文学的展開を「社会運動」のなかで考えることが、私にとつてはほとんど手つかずのまま残されている。新たに公開された「草稿ノート」の熟読も必要であろう。また、小説に比べて論及の少ない、とくに日本プロレタリア文学同盟書記長時代の文芸評論・社会評論などにも注目しなければならない。

ここで唐突だが、多喜二虐殺の二カ月後、三三年四月二十一日の『読売新聞』掲載「時代の人気者 解剖座談会」における大宅壮一の発言をみよう。そこでは多喜二について「何処でもボロを出さない、非難すべき点が見当たらない」、「だから仲間でもみな尊敬する」、「素晴らしい人気がある」として、「典型的な、理想的な左翼の闘士」と評している。皮肉屋の大宅ではあるが、この多喜二への賞賛はそのまま受けとつてよい。その評価は、同時代の志賀直哉らの評価と通底するだろう。しかし、その後は、虐殺の記憶も加わり、「典型的な、理想的な、左翼の闘士」像のみが一人歩きしてその内実が問われることが少なくなり、近寄りがたい存在とも見られてきた。

「グズグズと」躊躇逡巡する長い時間をへて、ついに「社会主義者」への「内的進展」を果した多喜二は、どのように「典型的な、理想的な、左翼の闘士」に成長していったのだろうか。一人の青年が並々ならぬ努力をつづけたというべきだが、何を観察し、何を経験したのか、その思想的・文学的

展開について、あらためてよく考えてみようと思う。

*

いうまでもなく二足のわらじの一方である「治安体制」を今後も考えていくにあたって、多喜二は大いに頼りになる存在である。以前にも指摘したことが、満州事変後において「戦争が外部に対する暴力的侵略であると同時に、国内に於いては反動的恐怖政治たらざるを得ない」（八月一日に準備せよ！『プロレタリア文化』三二年八月）と鋭く捉え、警視庁特高部の拡充などを治安体制全般のなかに位置づけることは、示唆に富む。

私にとって今後の指針となるのは、『蟹工船』などの北洋漁業における海軍警備の問題である。『蟹工船』の秀逸さは、その植民地的な苛酷な労働の実態を暴露し、抵抗に立ちあがる労働者層の成長を描くだけにとどまらず、帝国主義戦争の背後にある「経済的理由」の解明を試みようとした点にある。もともと実際にはそれは十分に追及しきれたわけではなかったが、「資本主義は……官憲と軍隊を「門番」「見張番」「用心棒」にしながら、飽くことのない虐使をし、そして、如何に、急激に資本主義化するか、ということ」（蔵原宛書簡、同前）への鋭い着眼点を提示した。蟹工船におけるストライキの鎮圧は「用心棒」としての役割の一つとはいえず、「帝国軍艦」としてそれは副次的な機能にとどまる。「見張番」「用心棒」としての主要な機能は、公海における工船蟹漁業の保護とい

う警備活動にあった。

監督「浅川」は漁夫らに向けて、「蟹工船の事業」の意義について「一会社の儲仕事」ではなく、北洋をめぐる国際上の漁業戦の「一騎打ちの戦い」であることを強調し、その「日本帝国の大きな使命のために、俺達は命を的に、北海の荒波をつつ切つて行くのだ」ということを知つて貫わにゃならない。だからこそ、あつちへ行つても始終我帝国の軍艦が我々を守つていてくれることになっているのだ」と叫ぶ。青森県大湊から出港した駆逐艦はカムチャツカ半島の東西沿岸を巡航し、領海十二哩（かいり）を主張するソビエト側の取締り漁船の拿捕・抑留などに対抗し、ときに拿捕漁船の奪回などの実力行動にでる（欧米諸国とともに日本側は領海三哩を主張）。

この駆逐艦の巡航は、発展する北洋漁業に不可欠なものと認識された。一九二五年に露領水産組合から海軍省に出された巡航期間延長を求める電報の一節——「第二駆逐隊のカムサツカ沖に於ける御駐在は露国の地方官憲又は監視船と本組合等の蟹工船との間の紛擾を全然予防し、殊に露国が主張する所の保護区域なる十二哩説を打破するに最も有力なる根拠と被認、本組合員等が何等の不安なく作業に従事することを得る」——は、それをよく物語る。一九二六年からソビエト側の取締りが強化されると、拿捕抑留事件が頻発した。露領水産組合はさらに駆逐艦による警備の拡充を請願する。このような意味合いにおいて、日ソ間の「一騎打ち」——「国際漁業

戦」、そのための海軍艦船の警備活動が重視された。

おそらく多喜二は函館などでの北洋漁業関係者への取材を通じて、公的な資料には残らない駆逐艦による「蟹工船」警備の実態に迫る。不漁がつづき焦慮した監督は領海内での密漁を計画し、その「見張番」「用心棒」役を駆逐艦に要請する。給仕の話として、「士官や船長や監督の話だけれどもな、今度ロシアの領海へこっそり潜入して漁をするそうだよ。それで駆逐艦がしつきりなしに、側にいて番をしてくれるそうだよ——大分、コレやっっているらしいな。(拇指と人差し指で円くしてみせた)」を挿入する。

また、草稿段階では、密漁容疑で発動機船が拿捕されると、その奪回のために「監督はすぐに、駆逐艦に無電を打った。「そろそろ罐詰も役に立つ時が来るんだで。」駆逐艦××は夕方本船の近くに停航した。監督と雑夫長、船長が又(！)罐詰を船員に背負はせて、駆逐艦に持って行った」という場面を設定していた。これらは、「国際漁業戦」を名目にした個別の利益追及のための供応⇨贈答である。実際にこうした供応と見返りの警備もあっただろう。

『蟹工船』冒頭の函館出航前の、「会社のオツかない人、船長監督、それにカムサツカで警備の任に当る駆逐艦の御大、水上警察の署長さん、海員組合の折靴」による博光丸船尾のサロンでの宴会は、こうした官憲の「門番」「見張番」「用心棒」に対する供応⇨饗宴を象徴する場面であった。「水上警察の

署長さん」とは、漁夫・雑夫らのなかに労働運動関係者や社会主義者が紛れ込むことやソビエト側からの「赤化思想」の流入への取締を任務とする外事警察を意味する。「海員組合の折靴」とは、労資協調の日本海員組合の幹部連を指す。

そして、多喜二は駆逐艦の警備活動のもう一つの目的にも言及している。やはり給仕に、見聞した話として、「駆逐艦が蟹工船の警備に出動すると言ったところで、どうしてどうして、そればかりの目的でなくて、この辺の海、北樺太、千島の付近まで詳細に測量したり気候を調べたりするのが、かえって大目的で、万一のアレに手ぬかりなくする訳だな」と語らせる。

「万一のアレ」という対ソビエト戦争に備えて、海軍省は地形や海流・気象などの調査を周到に進めていた。早くもロシア革命後のシベリア・カムチャツカ方面の混乱に際して、一九一八年にカムチャツカ沿岸の巡航警備に出動した警備艦武蔵の任務は、「此機を利用し、出来得る限り、我北方境域に於ける万般の事情」を調査することにあつた。また、一四二四年に出動した第十八駆逐隊の「堪察加警備報告」には、「国防上、将又国益上平時堪察加方面に於ける研究の必要な事は隣接国として今茲に贅言を要せず」と明記されていた。

「蟹工船」⇨工船蟹漁業を含む北洋漁業(さらに規模の大きなものとして漁区租借の露領沿岸漁業があり、これについても多喜二は「カムサツカ」から帰った漁夫の手紙)、『改

造』一九二九年六月」を創作している)は、監督「浅川」にいわせれば、「我カムサツカの漁業は……国際的に言つてだ、他の国とは比らべもならない優秀な地位を保つて居り、又日本国内の行き詰った人口問題、食料問題に対して、重大な使命を持つてゐるのだ」ということになる。国家的な権益という認識だが、多喜二の場合、それが日露戦争によつて獲得したものであるという見方には至っていない。

規模が拡大されるにつれ、北洋漁業の権益は「満州」とともに膨大な戦費と人的犠牲の結果として獲得したもので、という認識が広まった。一例だけ引けば、多喜二の「蟹工船」発表の直後の時期にあたるが、『大阪毎日新聞』記者としてカムチャツカを視察した長永義正はその著書『カムチャツカ大観』(一九三〇年)の「序」冒頭に、「ベーリング海、オホツク海の北洋とカムチャツカ沿岸はわが水産業の一大宝庫である。カムチャツカ沿岸に於るわが漁業権は幾多の先駆者が血涙の辛苦を嘗め、日露戦役といふ絶大の犠牲で獲得した帝国の権益である」と記している。満鉄を中心とする「満州」権益の数分の一という規模ではあつたが、北洋漁業の権益は日露戦争の大きな犠牲の上に獲得した「国益」という認識が強まり、それはさらに拡充すべきものであるものとされた。

多喜二の『蟹工船』に導かれて、私はようやく北洋漁業と海軍艦船の警備という問題に気づくことができた。それは、日露戦争時からアジア太平洋戦争時まで、ほぼ平時における

帝国海軍の「国益」確保・拡充を遂行した任務であつた。その全体の解明は今後の課題である。

*

このように私の問題関心に極力引きつけてだが、多喜二を主題とすることによつて、新たな「思想史」と「治安体制」の展望が開けつつあることを感じている。当然のこととはいえ、多喜二はこれまでほとんど「文学」の領域から論じられてきたが、それらとは問題意識や方法の異なる「史学」の領域からのアプローチは、相互に刺激を与えることになるであろう。

偶然のことながら小樽で生活することによつて多喜二と出会い、地の利のアドバンテージというさまざまな恩恵を受けることができた。今後もの幸運な環境を生かして、さらに豊潤な「多喜二学」の樹立に努めたい。

(小樽商科大学教授)

